

中学校英語科における 4 技能の統合的な言語活動の工夫 ― 「読むこと」を「話すこと」につなげる リテリング活動による実践研究―

高松市立龍雲中学校
教諭 久保 孝彰

1 はじめに

現行学習指導要領によって、「言語活動」の「高度化」がより一層求められている。これに伴い、教科書本文を活用し、教科書の内容を生徒がまとめ、自分の言葉で伝えるリテリング活動は高度な「言語活動」の一つとして位置付けられる。小学校より英語に親しみ、中学校でインプットする機会を十分に与えることで、今まで難しいと考えられていた活動が可能になると考える。中学校でのリテリング活動を通して、教科書の内容をまとめ、自分の感想や考えを伝えることで、高等学校でのさらなる学びへとつなげられる。このリテリング活動を通して、インプットを保障し、アウトプットの必要性を実現することで、「言語活動」から「言語行動」につなげられると考える。

2 実践内容・方法

(1) 課題設定の理由

言語を習得するためには、「インプット（「読むこと」、「聞くこと」）」が大切であるが、「アウトプット（「話すこと」、「書くこと」）」の機会が保障される必要があると言われている。令和 5 年 4 月の学年はじめに中学校第 3 学年を対象にアンケートを実施すると、2 年生の時に「英語を『読むこと』が伸びたと思う」生徒は肯定的意見が 85.6%であったが、「英語を『話すこと』が伸びたと思う」生徒は 57.6%であり、「話すこと」に対する苦手意識をもった生徒が特に多かった。

1、2 年生の時に「読むこと」に対して抵抗感が低くなった生徒が多いことから、「読むこと」を中心に「話すこと」につなげる 4 技能の統合的な活動であるリテリングを行うことで、英語を話すことへの抵抗感を軽減し、英語の力を伸ばしたいと考えた。

(2) 単元のまとめとなるリテリング活動

リテリング活動とは、生徒が英文を読み、その内容を英語で伝える活動である。単元の学習が終わった段階で、まとめとしてリテリング活動を行った授業が〔図 1〕である。授業の最初に復習として、教科書の本文を音読する。その後、生徒がキーワードを抜き出す。そのキーワードをつなげて 30 秒間のリテリング活動をペアで行う。その後、単元全体のリテリングを 1 分間でペアに伝え、評価を受ける〔図 1〕。

この授業の後で、生徒が ALT に対して 1 分間程度のリテリング活動を行い、ALT から評価を受ける。

活動内容	
復習	○ 単元のまとまりを音読
理解確認	○ キーワードの抽出 ○ 1つの本文のリテリング（30秒）
理解深化	○ 単元を通してのRetelling活動（1分）
自己評価	○ ペアによる評価、タブレット視聴

図 1 単元のまとめとなるリテリング活動の授業モデル

(3) リテリング活動導入の段階的指導

生徒にとって身近な教科書の英文を活用し、教科書の内容を知らない ALT に英語で伝えることを目標として活動を設定した。その目標のために、段階的な指導が以下の〔表 1〕である。

開始時期	活動内容	教員の指導内容
4 月～	①教科書の音読 ②教科書のキーワードの抜き出し ③話す時の導入を考える	・個々の生徒によって英語への理解が異なるため、「読むこと」に重点を置く。 ・生徒が教科書本文の重要な語句を抜き出し、教員と一緒に文をつくる。 ・質問や事実から話すことで、何の話をするか明確になるため、最初の一文を意識させる。
9 月～	④教科書の本文から文を抜き出すリテリング活動 ⑤話す順序を考える	・生徒が自分の言葉でリテリングすることは難しいと感じる生徒が多いため、伝えたいことを教科書から抜き出し、つなげさせる。 ・時系列で並び替えたり、伝えたいことから話したりすることで、話す順番を考えさせる。
10 月～	⑥文の終わらせ方を考える	・話し終わりに自分の考えや感想、今後の行動等を添えるように指導する。

表 1 リテリング活動の段階的指導

① 1 学期の指導について

毎回の授業では英文の内容を理解した後で音読を 10 回程度行い、生徒が授業中に英文を読める状態になったところで、宿題として 25 回程度の音読を課した。

リテリング活動については、本文中のキーワードを生徒と一緒に考えて抜き出し、それぞれの優先順位を付け（写真 1（ア））、それらの単語を教員と一緒に結び付けることで英文をつくった（写真 1（イ））。その時に、本文中の既習文法や新出文法を活用するように指導した。また、英語で話す時に、何から話したらよいか分からない生徒が多かったため、“I studied ～.”、“Do you know ～?”等の定型文から話し始めさせた（写真 1（ウ））。

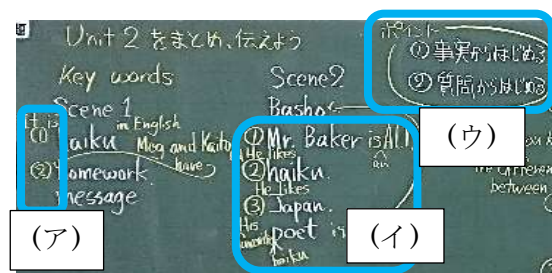


写真 1 授業の板書 7 月

② 2 学期前半の指導について

1 学期の指導により、生徒は教科書の内容を英語でまとめ、伝えようとする姿勢が見られた。しかし、授業の感想に「リテリング活動は難しい」と書いている生徒が多かった。そこで、2 学期の最初となる 9 月からは、序論、本文、結論で英文をまとめるように指導した。また、結論では生徒の感想、考えたこと、今後したいと思うこと等を入れることで、個々の生徒が自分らしいリテリング活動ができるように指導した。

③ 2 学期後半の指導について

10 月頃には、生徒が授業に慣れてきたことから、授業スピードがあがり、授業時間が 10 分程度余るようになった。そのため、毎回本文の指導をした後に、授

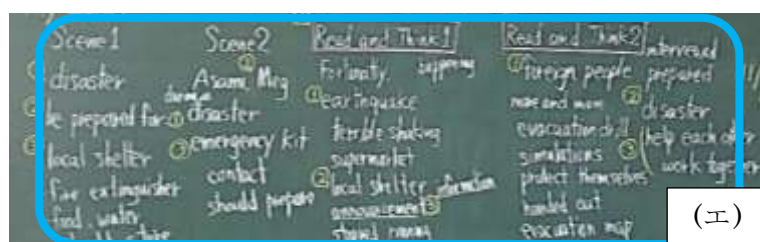


写真 2 授業の板書 10 月

業内容についてのリテリングを行うことができた。また、リテリング活動にも慣れてきたため、リテリング活動前にそれぞれのキーワードを結び付けて英文をつくることをしなかった。このため、授業中に2回リテリングを行い、2回目のリテリングでは、1回目のリテリングでの課題を改善させた（写真2（エ））。

（4）ICTの利用

タブレット PC によって、生徒の話した内容を録画することで、生徒の振り返りが可能となった。1回目のリテリングの場面で、生徒は自分の話した内容、表情、時間を確認し、その反省をもとに2回目のリテリングで改善できた（写真3）。



写真3 タブレットで課題に取り組む様子

3 実践の成果

（1）生徒の授業アンケート結果

4月から12月まで継続的に指導した結果をまとめたものが〔表2〕である。「英語の力が伸びている」と感じている生徒は75.0%（4月）から93.1%（7月）となり、12月には91.3%となった。12月には数字が低くなったが、9割以上の生徒は英語の力が伸びたと実感していた。

	4月	7月	12月
英語の授業で自分は英語の力が伸びていると思う	75.0%	93.1%	91.3%
英語で「読むこと」の力が伸びていると思う	85.6%	95.4%	92.9%
英語で「話すこと」の力が伸びていると思う	57.6%	80.0%	86.5%
英語の授業は楽しいと思う。	68.9%	93.8%	92.9%

表2 生徒の授業アンケートにおける肯定的意見の割合

英語のインプットとなる「読むこと」に関しては肯定的意見が85.6%（4月）から95.4%（7月）となり、92.9%（12月）となった。3年生の教材は内容や単語が難しく、本文も長いですが、9割以上の生徒が英語を読めるようになったと感じていた。

英語のアウトプットとなる「話すこと」に関しては、57.6%（4月）から80.0%（7月）となり、86.5%（12月）となった。苦手意識が強かった生徒も、段階的に指導した結果、英語を話す力が伸びたと感じていた。1学期から2学期末にかけて肯定的意見の割合が伸び続けたことは、本実践が有効であることを示している。

また、英語の授業を楽しんでいる生徒は68.9%（4月）から93.8%（7月）となり、92.9%（12月）となった。9割以上の生徒が授業を肯定的に受け止めていたのは、授業の中で生徒が英語の力が伸びていると実感した結果であると考えている。実際、生徒は英語の授業を楽しみにしており、「今日は英語の授業が2時間もある。ラッキー。」と言ったり、「今日はどんな授業をするのですか。」と質問したりする生徒が多かった。

（2）ALTによる評価結果

本実践では、生徒がパフォーマンステストとしてALTに対してリテリングを行った。ALTが継続的に評価をすることで、一貫性のある評価ができていたと考える。ALTによる評価をまとめたものが〔表3〕である。Aは「中学3年生としては十分」、B+は「AとBの間」、Bは「中学生として普通」、Cは「努力が必要」という評価である。7月に行ったUnit 2のリテリングではAの評価となる生徒が26.2%であった

が、授業内容が進み、リテリング活動を繰り返すごとに評価が上がっている。Unit 5ではA以上の割合が72.8%となった。また、Bの評価を受ける生徒が減少した。さらに、全てのパフォーマンステストを通して、C+以下の評価の生徒はいなかった。以上のことから、リテリング活動が、生徒の英語力を高めるために有効であると考ええる。

	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5
A以上の割合	26.2%	47.4%	60.7%	72.8%
B+の割合	62.7%	49.1%	34.4%	26.4%
Bの割合	11.1%	3.5%	4.9%	0.8%
C+以下の割合	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表3 ALTによる評価の割合

4 普及させたい取組と期待される効果

将来グローバル社会で活躍する人材を育成するために、英語は重要な言語の1つである。4技能の統合的な言語活動によって、言語行動やその先の言語習得へとつながる可能性がある。教員が言語習得のためにインプットとアウトプットの両方の機会を保障し、生徒が授業を楽しみ、英語の力を伸ばす本実践は有効であると考ええる。

(1) 英語の音読について

リテリング活動は、インプットが保障されている環境において可能な活動である。つまり、普段の授業において、ある程度のインプットができていることが前提である。生徒にとって英語を耳で「聞くこと」の機会は決して多くないことから、英語を「読むこと」を日常から取り入れる必要がある。授業では、単語のインプットから始まり、教科書本文の内容を理解した後、音読活動を行う。授業内の音読は最低でも10回程度行う。授業の中で、教科書本文を読めるように指導した後に、宿題として25回以上の音読を行わせている。教科書の英単語が読めることは、リテリング活動の大前提である。

(2) 4技能の統合的な活動の可能性

本研究では、4技能の統合的な活動として、「読むこと」を「話すこと」につなげるリテリング活動を行ったが、さらに応用することも可能である。

場面緘黙の生徒にとってリテリング活動は大きな負担となる。そのため、場面緘黙の生徒には、「読むこと」を「書くこと」につなげるリテリング活動を行った。またリテリングで話したことを文字起こしすることで、「話すこと」を「書くこと」につなげることが可能である。また、「聞くこと」を「書くこと」につなげるディクトグロスや、「聞くこと」を「話すこと」へとつなげるリテリングも可能である。

5 課題及び今後の取組の方向

今回の実践では「読むこと」と「話すこと」を統合した活動であったが、活動の中で話したことを「書くこと」に結び付けたり、聞いたことを「話すこと」に結び付けたりするなど多様なリテリング活動を設定することが可能である。リテリング活動によって、4技能の統合的な活動へと発展させ、生徒の英語力の伸長に結び付けたい。